

令和3年度（2021年度）卒業論文要旨

卒業論文

ドヴォルザークとチェコの民俗舞曲フリアント

大原早織 愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻（音楽学コース）

要旨

チェコの作曲家、アントニン・ドヴォルザーク Antonín Dvořák (1841-1904) は、自国の民謡や民俗舞曲に強い関心を抱き、自身の作品に採り入れたことで知られる。ドヴォルザークが生きた当時のチェコは、ハプスブルク帝国の支配下にあり、オーストリアの領土の一部とされていた。それゆえに、チェコの民謡や民俗舞曲を作品に用いたドヴォルザークは、祖国を愛したチェコ国民楽派の作曲家として語られる。しかしながら、ドヴォルザークの先行研究において、特定の民謡や民俗舞曲に重点を置いた研究はみられない。

本論文では、ドヴォルザークが楽曲に採り入れた民謡や民俗舞曲のうち、チェコの民俗舞曲であるフリアントに焦点を絞り、ドヴォルザークの作品におけるフリアントの使用について、多面的に明らかにすることを目的とする。フリアントは、ドヴォルザークが採用した民俗舞曲の中でも作品に用いられている数が最も多く、かつリズムが特徴的で判別しやすい。そこで、作品に現れるフリアントを明白にすることで、ドヴォルザークの作品における時代区分や、「スラヴ時代」とされる年代についても再考した。

本論文は、全2章で構成される。第1章では、ドヴォルザークの作風を概観し、ドヴォルザークの音楽において民俗的な要素がどのように扱われているのか明らかにした。第1節で「スラヴ時代」と呼ばれる作曲時期に着目し、第2節でドヴォルザークの民俗舞曲と民謡の使用について考察した。「スラヴ時代」とは、音楽性によって定義づけられるものであることや、曲名に含まれる地域名と民謡や民俗舞曲の使用に因果性はないこと、ドヴォルザークの作品には、民謡や民俗舞曲の音楽的な特徴だけが採り入れられていることが明らかになった。さらに、ドヴォ

ルザークが民謡や民俗舞曲を用いたのは、国民主義の音楽を創り出したかったからという理由だけではなく、音楽市場の需要に応える目的があったことを指摘した。

第2章では、ドヴォルザークとフリアントの関係性について明らかにした。第1節では、フリアントの要素がみられる20の楽曲を分析し、ドヴォルザークによるフリアントの特徴を見出した。第2節では、ドヴォルザークにとってフリアントがどのような存在であったのか、考察した。ドヴォルザークのフリアントは、熱烈で弾むようなリズムと「♪」というリズムで特徴づけられる。加えて、鋭いアクセントによるシンコペーションと急速なテンポによる活発な雰囲気によって、フリアントとみなされることが明らかになった。これらの特徴から、フリアントは声楽作品には採り入れられておらず、しばしば民俗音楽のドゥムカと組み合わせられた。最後に、フリアントが作曲された時期から、先行研究で述べられている時代区分について批判的に捉え、検討を加えた。

フリアントが採り入れられている作品の中には、楽譜にフリアントと明記されている作品と、そうでない作品があるが、本論文では楽曲同士を相対的に考察することで、フリアントの要素が採り込まれている作品を明らかにすることができた。チェコの田舎生まれのドヴォルザークにとって、フリアントは幼少期から親しんでいた身近な音楽だった。さらに、フリアントは4小節で特徴的なメロディが完結し、古典的な形式にも当てはめやすいため、他の舞曲に比べて多く用いられたのだと考える。